

倫社政経教育の実践と研究

(第6報告)

中尾正三

概要

本報告は次の四つの部分からなっている。

- I これまでの実践と今年度のこころみ
- II 倫社政経教育の可能性をさぐる
 - 1. 高校生の意識・態度・思考
 - ア 「期待される人間像」への反応
 - イ 「青年論」「学生論」への反応
 - ウ 「人間の道」への態度
 - エ 『思考の隘路』はどこにあるか
 - 2. 教授=学習過程の比較研究
 - (系統的講義、テーマ別教科書、資料中心)
 - 3. 倫社政経学習の効果
 - 4. 倫社政経学習の障害
- III 「思考の科学」科の提案
- IV むすび—今後の計画

I. これまでの実践と本年度のこころみ

1. これまでの到達点

昭和36年度から現在まで、問題としてきたことを整理してみると、(A)「①生徒の現実に立脚し、相互の交流の中で、②知的系統に支えられた抽象的論理的思考をどのようにしてゆくか、という方法上の問題」と、(B)「どのような内容・構造・焦点掘り下げ・具体化が必要かという内容上の問題」の二つにまとめられる。36年度から昨40年度までの実践を整理して次にかかげる。

36年度 第1報告

- ◎ 生徒の関心・興味・意識から出発
 - 話し合い一バズ
- ◎、○はテーマ
× は残された問題点
(A) は方法上の、
(B) は内容上の問題点。
- 討論、資料集の自作、評価せず
- ◎ 講義学習とグループ学習の比較検討
 - × 話し合いの限界(A) 抽象名詞・固有名詞・思想の系譜のとり扱い(B)

37年度 第2報告

- ◎ 講義学習の中での内容のとり扱い
 - ヘレニズム思想(とくにエピクロス)・東洋思想・宗教・マルクシズムに重点
- ◎ 一斉学習の中での集団思考
- × もっと掘り下げを—(B)、話し合いはやはり必要である—(A)・評価は必要である—(A)

38年度 第3報告

- ◎ 1年から週1時間2年間継続実施
- ◎ 系統学習とテーマ学習の比較研究

× 相互交流の重要性(A), 抽象的論理的思考の発達段階と学習内容(B), 焦点づけと具体化(B-A)

39年度 第4報告

- ◎ 講義・自発発表・話し合い学習の比較研究
- ◎ (心→倫) から (心→社) への変更
- × 話し合い学習の中での知的系統 (B-A), 講義学習の中での相互交流 (A-B)
- 教科書の内容構造・配列の分析 (B)
- 生徒の抽象的思考の発達段階と教授方法 (A)

40年度 第5報告

- ◎ 教材構造配列のくみかえによる学習効果の比較検討 (B-A)
- 倫社思想史と世界史 (B)
- 政経学習上の困難点 (A-B)
- 倫社・政経学習を終了しての生徒の感想 (A・B)
- × 内容の精選・構造化 (B) 抽象的思考力を如何にして身につけさせていくか、『受験』に対してどのように対応するか。(B・A)

以上を追求してきたわけであるが、教科としての倫社・政経の性格の規定、方法論の問題については私なりに一応の結論を出し得たものと思う。問題は、内容と、論理的抽象的思考の形成の二つにしばられてきたような気がする。

そして、第五報告の終りに、研究の仮説テーマとその限界を次のようにのべておいた。

「上にのべた課題をふまえて、来年以後順次

a. 倫社

ア 倫理思想史の主題的構成と系統史的構成と古典読書を中心の構成の三つの内容編成と、それによる学習効果の比較検討(41年度、高2三クラス対象)

イ. 教科内容全般の構造配列のくみかえによる比較研究
(42年度以降)

b. 政経

ア 教科内容の比較検討(異なる教科書を用いて)
イ 『現代的内容』の導入、時事問題一白書・新聞などを利用して一学習指導

c. 以上の中での論理的思考の訓練—そのための方法の探求と、生徒の思考過程の研究

以上のような研究計画を現在たてている。

今までの研究は、まことに暗やみの中を手さぐりで進むようなものであった。そのため、幾つかの間違いを犯したり、また現在の一応の到達点も完全なものではなかろうということを筆者自身感じている。とりわけ、倫社・政経を一つの知的教科と規定して、そこからはみ出るもの—社会的実践的態

度とか、人格的感化的要素とか、更には、人間行動の原動力ともいべき心情につながる国民感情(ナショナリズム)，一方では人間として無視できぬ実存的宗教的要求など、総じて情操とか実践とかにつらなる重要な問題をそこでどう位置づけるか、という問題はいつも心の底にある。これらの課題をも絶えず視野の中において、研究をすすめていかねばならぬとは自戒している。」

2. 本年度のこころみ

本年は倫社において、教科書は現行の中で唯一つのテーマ別編集をとっている帝国書院版を使用し、①それをそのまま講義中心ですすめるAのコース、②教科書は傍用とし、世界史の教科書をもとにした系統的思想史の講義のBコース、③初めは話し合いを中心とし、後は資料集(現代教養文庫「世界の思想家たち」)を読みながらすすめるCコースの比較研究をすすめた。かたわら、倫社政経を学習する生徒に(ア)「期待される人間像」(イ)青年論、高校生論(会田雄次「『西欧ヒューマニズムの限界』所収の文」、宮原誠一「『青年期の教育』の一部」)についての反応、(ウ)モリス「人生の道」にある10の生き方に対する態度、(エ)「思考の隘路はどこにあるか」の、4つの調査をおこなってみた。

さらに、本校における「後期中等教育の改造の動向」についての研究グループの中で、高校教育課題改訂の問題点、とくに高校生の思考力の訓練の方策をめぐっての研究に参加した(本紀要P. 49参照)。それらの実践・調査・研究の成果をまとめて、第六報告したい。

II. 倫社政経教育の可能性をさぐる

1. 高校生の意識・態度・思考

ア. 「期待される人間像」への反応

「人間像の最終報告要旨」「朝日新聞」41年9月19日夕刊所載全文)をコピーして、高校2・3年全員に読ませ、その意見をまとめたのが次の結果である。自由記述と選択肢アンケートと両方こころみたが、およよその動向を示すため、プラスと中間とマイナスの反応に分類しパーセントで示したのが第1表であり、それぞれのタイプによる生徒のなまの文を次に引用しておく。

(第1表)

期待される人間像 %

	全	高2	高3	男	女
+	37	45	27	40	35
○	32	40	45	40	46
-	21	15	28	20	19

<何故出されたのだと思うか>

⊕的反応の例

- 我々高校生に対し、これから教育方針を定めるため。
- 亂れた国民の考え方を正すため。
- 産業技術の発達に人間性の向上が伴わず、人間が手段化されるおそれがあるため。
- 現在我々青年は近代の産業の発達に伴っての生活のために、夢もなく小さな世界にとじこもり、個人的な考えに自分が自分が一という考え方をしている人が多いためではなかろうか。
- 現代の若者はただ自分の将来の小さな夢だけを追って勉強に青白くなったり、希望を抱くのを忘れてプラプラと毎日を送っているので、そういうものたちに一つのしんを入れようとして出されたのだと思う。

中立的反応の例

- 日本人は如何に生きるべきか—その問に対する参考意見として出された。また、現在の日本人とくに若者のモラルの低下がめだつてきつつある。その予防策として出されたと思う。
- 戦後20年、日本の国内で、思想や価値観などが変動し、国としての、又は国家の教育の方向というものが定まっていない。時期的に考えても、何らかの方向が示されなければならない。そのために出された。
- 戦前の教育勅語が崩れて20年余、まだ日本人の方向をはっきり示したものがない。そろそろそのようなものが欲しくなって出されたのではないだろうか。

⊖的反応の例

- 国民がこうなると便利だ、と思ったからでしょう。
- 機械的な忠実な人間をつくるため。
- 従順で小規模で、小さな幸福(俗的意味での)を願うJISマークつきの人間ばかりゴロゴロ生みだすため。

<「人間像」の考え方をどう思うか>

⊕的反応の例

- 日本人において今一番欠けているものは愛国心ではないかと思う。むやみやたらに外国にとりつかれて、日本人としての意識が欠けていると思う。
- 天皇はやはり必要である。これは日本のものである。
- 何か日本人すべてが心の支えとなるようなものがほしいと思っていた。この「期待される人間像」は今の私はうってつけといいたい。
- 自国の文化をもち、自国を愛することは、一つの国民としての義務であると思う。最近の日本人にはそれが大いに欠けていると思う。あれだけすぐれた、深い東洋哲学というものを歴史上残したならば、その本質をつかむよう心がけるのが大切であると思う。
- この文の最もいいことは、日本という一つの国を、今一度しっかり心にきざみつけよということだと思う。僕は大へんけっこうであると思った。
- 現代の私たちは目先のことばかりを考えがちだから、

国家主義的な点を取り入れることも重要である。

- 私たちの生活の指針にし、よりどころとするのに不足はないと思います。「天皇」がとやかくいわれますが、私はそれでよいと思います。現在私たちは、日本の国を愛するということに少々かけていると思います（自分のことで精いっぱいで一）。

中立的反応の例

◦ これを読む前の僕の「期待される人間像」についての感じは、カチカチのガシコおやじの、愛国心などという言葉がやたらにでてきてどうも好かんと思っていたが、これを読んで、少しはその考えが変った。思っていたほど好かんことはなかった。

◦ だいたいはなるほどうなずけた。これはいずれも現在の日本の状態をよりよくしようとしている。人間性の向上はなるほど必要である。また能力にあう職業ということについて、私もこうなるとよいと思う。

○的反応の例

◦ 現在の日本においてこのような文書があらわれることは必要なことかもしれない。たしかに「人間性の向上」も「民主主義の確立」も「自覚した世界人」になることも「家庭の愛」「國家の愛」も、すべて現在の日本人になくてはならないもの、欠如しているものである。ただこれが中央教育審議会の委員が期待し理想とする人間像であってはいけないと思う。それが国民から自然にわきあがってきたような、そんなものであるべきだ。

◦ 「個人の自由や個性を尊重する」とうたいながら、無理に「期待される人間像」と我々におしつけようとしている。これは矛盾だと思う。とにかく僕にとって、これらはあまりにも狭い視野にたちすぎていると思えるので賛成できない。我々はこれらの文面に表われている单なることばのあやにひきずられてはならない。

◦ これは何か政府の考え方通りに日本人をその方向に向けさせようとしているような感じがする。

◦ 我々に与える印象は「優等生的作文、すなわち文章がきれいな、教科書のおしつけ的なもの」一。もっとゆれ動いている世界の中の日本という国を統合させるには、こんなものでなく、もっと現実的な、若々しい創造性のあるものを作ってもらいたい。単に優等生の作文でなく一。

◦ 仕事にうちこむこと、それが国家に貢献するとあるが、たとえ一生けん命働いても国の税金のとり方は不公平だし、汚職や脱税など、現状においては全く権力者のほしいままになっているこの世の中で、そんなことをいうとは、政府はちょっと調子がよすぎると思う。

◦ 天皇至上主義の精神が一貫して流れていると思う。日本国を愛するものは象徴である天皇を愛せ。天皇を愛さないものは日本国を愛さないという考えには反撃を感じる。

◦ この報告の天皇のところでは、強要するような形になりそうである。この点は大きいと思う。また全体主義に結びついてしまっていそうな可能性もある。

◦ 天皇を敬愛せよといいながら、これを作った人々はまた天皇を利用しているだけのように思われる。昔いわれた天

皇ということばと、今の天皇ということばの間には、根本的に大きなちがいがあるのに、天皇と日本国を強く結びつけすぎている。

◦ 私は天皇は統合の象徴の所が一番気に入らない。こんな事を書かれていては、まだ日本が封建制的にみえる。米国のような水準の高い国が天皇らしきものがいなくてもりっぱにまとまっている。こんな所に「天皇」を出すなんておかしい。

イ. 「青年論・高校生論」への反応

前掲著の中で会田雄次氏は何も考えようとしない現在の学生を旧制高校生と対比して慷慨し、宮原誠一氏は受験体制の中で予備校された高校の歪みを指摘し*、むしろ、高校に入らなかつた中学卒の青年の中にかえつて好ましい人間を見出すとのべておられる。それらの文を読んでやって、自由作文で自分の考えをまとめさせてみた。生徒の文章を大まかなタイプに分類し、それぞれの代表的な文の一部を引用しておく。なおA・B・Cの各タイプがそれぞれ3分の1ぐらいずつであった。

*(注) その文の一部。「青年期の矮小化された発現が若者らしさだと本人たちにも思われ、はたももそう見ている。しばしば知的な探求になっていない反撃と疑惑、思想的な沈潜にならない不安、構想力に転化しない孤独感、なにものにも対決することのないふてくされが、おとなのように無感動で、子どものように依存的な勉強や処世とかさなりあってい

A 共感するもの

- 知的にはするが画一的妥協的にする高校教育…。
- なれあい主義、何とかなる主義…。
- 多くの疑問に『常識』というコトバをかぶせて盲にならがる。
- 何かやりたい、ぶっつきたいと思っていても…。
- ただその日を無事にすごせば…。
- 他の面に力を注いでいたのではおくれてしまう。
- 考えさせられるのは苦しい。…おもしろい小説を…。
- 妙に「青年期」ということで甘やかす。生徒も甘えてしまう。

B 反撃するもの

- B₁ 単純な反撃
- 自分のまわりの中学生はそうではない。
 - 私の知っている中学生は本よりテレビがよいらしく、あまり読まない。

B₂ 疑問をもった反撃

- 中学生だけにみんながなつたら、日本の社会の発展はなくなる。
- そうなると、大学へ行くほど知的退廃はひどくなるということになるのか？

B₃ 客観性をおびた反撃

- 中学生のよい面だけをとりだし、高卒者の悪い面だけを比較するのは公平な見方ではない。

- 全部が全部そうとはいえない。たまたまその人がよい人で、純粹に近い人だったからだろう。

C 否定的・自分の意見をもつもの

C₁ 素朴な自己主張

- 試行錯誤しながら進むのが青年期のよさ…。
- 若さ、未熟さ一だからこそ曲りくそった道にも生きがいをもって…。
- 知的退廃でなく、思慮深くなつたせいである。

C₂ 客観的条件の考察

- あまりにも教育を受ける人が多くなつたせいか。――考える人の絶対数はそう変っていないのではなかろうか。
- 高校は変化してきており、社会も変化してきており、社会の変化にとって学ぶ人々にも変化がある。
- ものごとをみつめるというようなことが必要な職場が日本中に一体どれほどあるのだろうか。

C₃ 主体の一建設的な自己主張

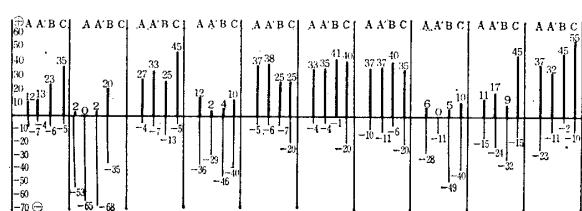
- 私は悟ったふりをして、またいつか来る日のためにその手がかりが残してある。それが今の自分の支えである。
- 高校で考え、学ぶということはやはり意味がある。私は高校でものを考える時間を得、成長し、生きていくことについての大きな問題をみつけた。まだそれを解いていない。それを知るために、私は今大学へ行こうとしている。
- 高校のもつ意味、多くの知識、物の見方、考え方、中身の濃い勉強――を見おとしてはならない。

ウ. 「人間の道」への態度

チャールズ・モリスの“Variétés of Human-Value”の中から見田宗介氏が紹介された*13の「人生の道」のうち、歴史上の主要な人生哲学と結びついで10の生き方をえらんで、次にかかげる全文を印刷して本校の生徒（高2, 150名）、名古屋工業大学二部（夜間）学生（2年、160名）、勤労青年と学生を含む30名の佛教青年会のメンバーにそれぞれ7段階に評定してもらった。それを④○⑤の三段階にまとめてパーセント化し④と⑤を示したのが第2表である。表のAは高校生、Bはそのうち女子のみ、Cは夜間大学生、Dは仏青をそれぞれ示している。

*雑誌「潮」41年10月号、見田宗介「<人生観>の社会学」

第 2 表



第一の道

この「生活設計」によれば、人は社会生活に活発に参加する。それは、主として変革するためでなく、人間が達成した最上のものを理解し、観賞し、かつ保存するためである。過度の欲望を避け、中庸を求めなければならない。人は人生のよきものを望むけれども、秩序ある仕方で望むべきである。人生は明析、バランス、洗練、規則をもたねばならない。野卑、熱狂、不合理、短気、耽溺は避けられなければならない。友情は尊重されねばならないが、やたら多くの人々となれ親しありしてはならない。人生は訓練、叡智、礼儀、予見をもたねばならない。社会の変化は徐々に、かつ注意深く行なわれなければならない。それは、人間の文化において達成されてきたものを失わないようにするためである。人は身体的にも社会的にも活動的でなければならない。しかし熱狂的になり急進的になつてはならない。つつしみと知性によって、活動的な生活に秩序が与えられねばならない。

第二の道

人はたいていの場合、世の中のこととは「成り行きにまかせ」ておいて、私生活にとじこまり、自分のために多くの時間をもち、自分自身の生活を支配するように努めるべきである。自己満足、反省と瞑想、自己認識が強調されるべきである。社会集団との親しい交わりに関心をもたず、自然環境を支配しようとする試みにも関心を示してはならない。人は自分の外生活を単純化し、自分自身の外にある物理的、社会的な力によって満足を左右されるような欲望は節制すべきである。そして、関心を自分自身の修養、解明、自己規制に集中しなければならない。「外面向的な生活」によっては、失くのこととなしとげたり、手に入れたりすることはできない。他人や事物のことは避けて、生活の中心を自己の内部に見出さなければならない。

第三の道

この生活法は他人への同情的な関心を中心とする。愛こそ人生における最大事である。この愛は、自分が他人の負担になったり、他人を自分のために利用したりする意図がみじんもないものでなければならない。貪欲な所有欲や、性的な情熱の強調や、他人や事物にたいする支配欲や、知性の過度強調や、自己自身への不当な関心集中は、すべて避けられるべきである。なぜならばこれらることは、人びとの間の共感的な愛をさまたげるからである。この共感的な愛のみが人生に意義を与える。攻撃的になるならば、眞の人間的成长のために必要な人間的な(愛の)力にたいする感受性が妨げられる。したがって人は、自己を純化し、自己主張をひかえるとともに、他にたいしては思いやりのある態度で尊重し、助力しなければならない。

第四の道

人生は楽しむためにある。官能的に思う存分たのしむべきだ。世界や社会や他人の生活のすすむ方向を規制することを人生の目的とはしてはならない。人生の目的は事物や他人に心を開いてこれを受け入れ、その上で楽しむことにある。人生は道徳的なしつけのための道場や学校でなく、お祭りのようなものである。気分のおもむくままに生き、事物や他人の

好きなとおりにさせておく方が、何事かをなし—あるいは善をなすよりも大切である。しかし、このように楽しむためには、現在何が起こりつつあるかをするどく感知し、新しい事象にたいしてはこだわりのない態度で接するために、充分自己中心的でなければならない。だから人との係り合いを避け、特定の人びとや事物に依存しないように注意し、自己犠牲をしてはならない。ひとり楽しむこと多く、瞑想と自己認識のための時間をもたねばならない。孤独と社交とは共に、よき人生には必要である。

第五の道

人は自分を固執したり、人びとから退いたり、お高くとまって自己中心的になってはならない。社会集団の中にとけこみ、協力と友情とをたのしみ、共同の目標の実現のための断乎たる活動の中に、人びとと共に参加すべきだ。人間は社会的、かつ活動的なものである。人生は、精力的な集団活動と、協同的な享受のうちに没入しなければならない。瞑想、拘束、自己満足への関心、抽象的な知性、孤独、所有への執着はすべて、人びとを結合するための根を断ってしまう。人は外的な生活に喜びを見出し、人生のよきものを楽しみ、快活な精力的な社会生活を可能ならしめる事物を確保するために、他人とともに働くべきだ。この理想に反対するような人をあまり甘やかしてはならない。人生をあまり気むずかしく考えてはならない。

第六の道

人生はとかく停滞し、「居心地よく」なって、思考の青白い鎧型の上で生氣を失いがちである。これらの傾向にたいして人は、不斷の活動の必要性を強調しなければならない—それは身体的な活動や、冒険や、個々の具体的問題が現わるごとに現実的に解決することや、外界や社会を統制する技術を改良すること、などである。人の将来は、主として彼の行動によって左右されるのであって、彼の感情や思弁によってではない。〔解決すべき〕新し問題はたえず起こるし、まだ将来も起こるであろう。人間が進歩すべきならば、つねにあらたな改良がなされなければならない。われわれは過去にそのまま従ったり、将来あるべき姿について夢みてばかりいるわけにはいかない。われわれを動かす力を支配するためには、われわれは決然として、不斷の努力をしなければならない。科学的知識のもたらす技術の進歩に、人は信頼をおかねばならない。人は自分の問題を解決することを目標とせねばならない。よきものはよりよきものの敵である〔小善に甘んじてはならない。〕

第七の道

われわれは時と場合に応じて、他のすべての人生の道の中から、何ものかを受けとらなければならない。しかしそのうちのどれか一つに、身を捧げてしまってはならない。ある時にはある人生の道が適切であり、他の時にはまた他の道が適切である。人生は享楽と活動と思索とを、ほぼおなじ位ずつ含まねばならない。そのうちのどれか一つが極端に強調されると、われわれ人生において貴重な何ものかを失なうことになる。だからわれわれは柔軟性をやしない、われわれ自身の多様性をみとめ、この多様性のひきおこす緊張をうけ入れ、

享楽と活動の合間に解脱の時をもたねばならない。人生の目的は、亭樂と活動と思索とのダイナミックの統合のうちに、しだがってまた、さまざまな人生の道のダイナミックな相互作用のうちに存する。人は生活の建設のために、それらすべてを用いるべきで、どれか一つではあってはならない。

第八の道

享楽こそ人生の基調となるべきである。ただし、強烈で刺激的な快楽の熱狂的な追求でなく、単純でたやすく手に入る快楽の享受である。すなわち、生きていること自体のよろこび、風味ある食物の快、居心地よい環境の快、友人との談笑の快、休息と気晴の快、などである。あたたかく居心地のよい住まい、やわらかな椅子と寝台、食物のたくわえられた台所、友だちのためにひらかれた門戸—これこそ生きるべき場所だ。身体は安樂にくつろいでおり、動作はしづかで、あわただしくない。ゆっくり呼吸し、うとうと休みがちである。この世の中に満ちたりて感謝している。人を駆りたてるような野心や、禁欲的な理想にたいする熱狂は、不満をもつ人びとのしるしであって、そのような人びとは単純な、気楽な、健全な享楽の流にだだよう能力を失なってしまったのである。

第九の道

受容性こそ人生の基調となるべきである。人生のよきものは、求めずしておのずからやってくるものである。それは決然たる活動によっては得られない。肉体の感覚的な欲望への耽溺によても得られない。さわがしい社会生活に参与することによても得られない。他人を助けようとして他人にそれを与えることもできない。一生懸命考えても得られない。そしろそれらは、自我の閂門が開かれた時に求めずして得られるのである。欲望をすべて、やすらかな受容性のうちに待つならば、自我は自分をやしない育て、自我をとおして働くところの諸力に向かってひらかれる。これらの力にやしなわれながら、自我はよろこびと平和を感じる。大空の下、樹木の陰にただひとり坐して、自然の声に耳をかたむけ、しづかに心を開いている時、自然の叡知が心の中に招かれる。

第十の道

克己こそ人生の基調となるべきである。ただ世の中からしりぞくという安易な克己でなくて、世界の中での、厳しく男らしい克己である。そして外界のきびしさと、人間の力の限界とを知ることである。よき人生とは、高い理想を保持し、これに方向づけられた合理的な生活である。安樂と欲望の誘惑に負けてはならない。社会的なユートピアを描くのでもない。最後の勝利を信ずるのでもない。あまり多く期待することはできない。けれども人は、自我のたずなをしっかり握って、不当な衝動を抑制し、世界の中での自分の位置を理解し、理性によって行為をみちびき、そして自主独立の立場を保持することはできる。このようにして、（人は結局滅ぶとはいえ）人間としての気品と尊厳とを保ち、宇宙の理法にしたがって死ぬことができる。

(注) この10の生きき方は、次のように歴史上の主要な人生哲学とむすびついている。

第一の道(アポローン神話と孔子の思想)、第二の道(佛陀)

の思想), 第三の道(キリストの思想), 第四の道(ディオニソス神話), 第五の道(マホメットの思想), 第六の道(プロメテウス神話とゾロアスターの思想), 第七の道(マイトレーヤ^{くみろくぼ}さつ)の神話), 第八の道(エピクロスの思想), 第九の道(老子, 莊子の思想), 第十の道(ストアの思想)

エ. 「思考の隘路はどこにあるのか」

<これまでの到達点>でのべたように、「論理的抽象的思考の形成」が私の焦点であった。また東京教育大附属高校の齊藤弘氏が、その研究報告^{*}の中で

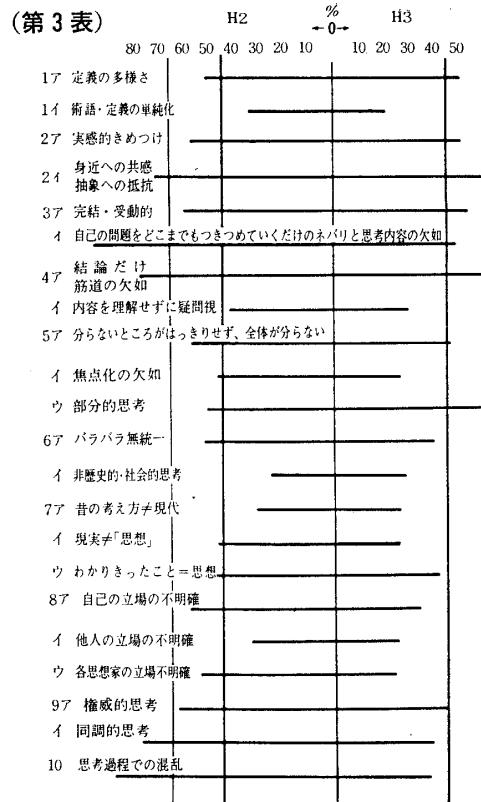
「生徒の思考・認識の実態(主体性の欠如, 感覚的・常識的傾向, 無思想性, 自己中心的傾向など)の報告はある。あり方, 内容・事項の批判的検討はされている。しかし, «だからどうしたらよいか»の具体的解決方法は示されることがない。それでは, 今のような倫社を学習させても無意義であるし, むずかしいことであるとしてしまうことになりやすい。それらを社会体制や受験体制に還元してしまうだけにとどまってしまうならない。生徒が考えたり, 認識したりする実態を学習の場面の中でとらえ, その思考論理の構造を明らかにすることによって, どう働きかけたらよいかの方策を見出す努力を重ねるべきである」

とのべておられる点に同感である。

(*昭和41年10月全国附属高校研究会報告書)

同氏の報告にある思考論理のパターン分析を参考にして, 次のような調査項目について生徒に自己分析をさせ, その結果,自分が「思考の隘路」であると思うものを選ばせ, それをまとめたものが第3表の図である。

1. ア. 定義, 立場の多様さが分らなくて混乱する。
イ. 術語定義を単純に自分なりにうけとりやすい。
2. ア. 自分の感じだけでかんたんにきめつける。
イ. 身近なことは共感するが, 抽象的なものはいや。
3. ア. 思想というものを, でき上った, しかも, 現実とかけ離れたものだと思いやすい。
イ. 自分の問題を自覚し, それをつきつめていくだけの問題意識や思想内容をもたない。
4. ア. 結論だけをうけとろうとし, その筋道をとらえない。
イ. 内容を理解した上での疑問や問題提示でない。
5. ア. 分らないところがどこかはっきりせず, 全体が分らないことになる。
イ. 焦点をしぼったとらえ方がはっきりしない。
ウ. 部分的なことにこだわり, あげ足とりをする。
6. ア. パラバラのものを統一することができない。
イ. ものごとを歴史的社会的にとらえられない。
7. ア. 昔の考えは現在には通用しないときめつけやすい。
イ. 現実とはなれたことを考えてもしょうがないと思う。
ウ. わかりきった, あたりまえのことを, なぜむつかしく理くつをつけて, 分りにくくする必要があるかと思う。
8. ア. 自分の考えがたっている立場がはっきりしない。
イ. 他人の立場がはっきりわからぬ。
ウ. 各思想家がそれぞれ勝手に自分の考え方をのべているのだと思い, それぞれに考え方の立場があることに気づかない。
9. ア. えらい人, 権威ある人がいっていると, そう思いやすい。
イ. まわりの人がみんなそうだからそうだなんだな, と思いつみやすい。
10. 思考をすすめていく過程で混乱がおこりやすい。



以上の結果をうみだす条件を考えてみると次のようになろう。

思考の隘路

1. 外的条件(社会的)

- ア. 現実社会とその変動。テスト体制・進学競争。教育統制。理念の分裂と相剋。
- イ. 知識人と庶民の断層、難解・現実遊離の思想、といった学問文化の日本の特性。
- ウ. 大衆社会・中間文化、マスコミ・映像文化、感覚的享楽的風潮。

2. 教育現場の条件(1.によって規定される。)

- ア. 不完全な教育課程、教科書の内容。
- イ. 暗記中心、詰込式的勉強、思考訓練の欠如。
- ウ. 読書せず、思考せずという生活。

3. 内的条件(心理的)(一人間性と、青年期の一)

- ア. 未成熟な自己中心的思考。
- イ. 意情・合理化という人間的弱さ。
- ウ. 不安定、性急さ、憧れ一。

4. 思考の場での条件(1・2・3によって規定される態度)

- ア. 結論だけを受けとろうとする。
(権威主義的・同調的・受動的な思考)
- イ. 感覚的反撲・きめつけ。
(甘え・享楽的傾向、感覚的・感性的な思考)
- ウ. 思想への無縁感と反撲。

(社会的・歴史的な知識の不足。文学的感動をもたない。自分の問題意識をもたず、思考内容をもたない。それに加えて既成思想の現実遊離の傾向などから一)

- エ. 身近かなものへの共感と抽象的思考への抵抗
(論理的概念的思考の訓練不足、映像文化の氾

謙)

オ. 多面的思考の未成熟。

(それぞれの立場があることがはっきりせず、定義や立場の多様性が分らない。)

カ. 全体的思考の未成熟

(部分的なものにこだわり、全体としてうけとうとしない。バラバラなものを統一することができない。焦点をしぼったとらえ方ができない。分らないところがはっきりとしない。)

以上の項目の中で、生徒が隘路として最も多く意識しているのは、4.のア・イ・ウであって、エ・オ・カといった自分自らの内部にある隘路の自覚は少ない。まして、1, 2, 3の彼らを規定している条件については——である。しかし、少くとも彼らが自ら「思考や思想への抵抗感や無縁感」を自覚している条件を一応認識しておくことは必要であろう。以下、生徒のなまの文を若干引用しておこう。

- 時代の大きな流れの中で、立ちどまることのできないベルトコンペアにのせられて、考えるために立ちどまると降されてしまうような感じ。
- 考えたってしようがない。考えるより記憶した方がよい。大人が考える余裕をくれない。
- 考えること、それを発表することを、社会が要求しない。
- 身近かなことすら考えられないのに、それより大きい抽象的なことが考えられはしない。
- マスプロ教育の中で、できるものだけを選んでいるテスト受験的勉強で、うわつらだけをやるだけで、じっくりととりくもうとしない。
- 先生に叱られねよう、うまく答えられるよう——。
- テレビ・ラジオがかんたんにたくさんの中を教えてくれるから、苦労して本を読む必要がない。
- スピード化の時代、早く知りたい、吸収したい。書物では時間がかかりすぎる。
- 勉強するなかみは多いのに、一日は依然として24時間しかない。
- 昔の旧制高校、大学生はエリートで、将来は指導者としての地位が約束されていた。
- 「考える」ということが、ネウチのあることだと、昔は考えられていた。
- 不自由さが何もない社会で、考える必要もない。
- スポーツ、映画、音楽を楽しんだ方がよい。
- わかりきったことをむずかしい言葉でいっているだけである。
- 現実とあまりにもかけ離れている「思想」。
- 机上の空論ではダメである。

2. 「教授=学習課程」の比較研究

ア. 倫社の授業（三つのコースの比較）

1 でのべたように、A（テーマ教材）B（系統的思

想史）C（話し合い→資料）ですすめた授業について、1学期なかばに、*先年度の感じと、現在の感じとを調査し、2学期終了時に同じ調査を行なった、その結果をまとめたのが、表3、表4（どのやり方が望ましいか）である。去年、1.・2. とあるのはその変化を示したものである。

*この学年は、1年の時に、心理学的分野と社会学的分野を学習し、2年で倫理学・思想史的分野を学習する方法をとった。くわしくは第4、第5報告参照)

(表3) %

変化	やり方 うけとめ の方	テーマ A			系統 B			資料 C		
		+	0	-	+	0	-	+	0	-
興	去年	51	29	20	48	38	14	64	28	8
	1.	40	38	12	42	35	13	62	26	12
味	2.	42	24	34	45	23	21	66	23	11
有	去年	44	44	12	44	42	14	47	47	6
	1.	58	29	13	50	35	15	53	45	2
益	2.	66	20	14	54	34	15	66	30	4

(表4) %

	系統について			テーマについて			資料について		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C
1.	18	31	36	64	56	55	18	13	9
2.	26	47	49	61	45	29	13	8	25

この結果を検討してみると、おおよそ次のようなことがいえる。

① 去年のクラスは解体され、新編成のクラスでそれぞれABCの各コースを行なったのであるが、1の時点での印象には、去年のうけとめ方の想起が投影されており、その限りにおいて意味がある。

② 1学期なかばは、まだ倫理思想の学習になれておらず、何らかの抵抗があって、興味の⊕が去年より減少するが、2学期末にはそれぞれのコースにおいて⊕が増加している。

③ 興味の⊖は、1→2の過程で<資料>Cコースにおいて減少しているが、<系統>Bと<テーマ>A、とくにAは⊖が増加している。⊕の量から判断しても(42:45:66)、資料を利用することの有効性はたしかにあると断言してよからう。

④ <テーマ>Aと<系統>Bと比較してみると、興味はややBがまさり(⊕42:45, ⊖34:21)、資料を利用するとの有効性はたしかにあると断言してよからう。

まさるといえる。恐らく、テーマのやり方は、思想への興味・知的抽象的思考能力のあるものには有益でかつ面白かったろうが、普通のものにわかりやすいのは系統思想史のやり方であるといえよう。

⑤ 表4についてみると、それぞれ各コースとも自分のやり方を支持する者が一般的に多いようである。生徒はタテマエにおいてはテーマ式のやり方を初めは支持しているが、学習をすすめる過程で（とくに他のやり方をとったコースで）ややその支持が減少する。先に③で資料の有効性をのべたが、生徒のタテマエ的支持は少なく（Cでも9→25%の程度）、ある程度の強制の必要を感じさせられる。系統的授業についてはBコースの生徒でも31→47%の程度で、とにかくタテマエとしては生徒がテーマ的なものがいいと思っているという現実を確認しておかねばならない。④で指摘したテーマ式の問題点をあわせ考えてみる必要がある。

イ. 倫社と政経の比較

高3で政経を学習した生徒に倫社と政経について、興味、有益の度合を調査した結果を図で示したのが表5である。⊕○⊖に分類し、⊕と⊖をグラフであらわした。なお、男女差を見るため、全員のグラフの他に女子のみのグラフを作成した。結果は昨年（第5報告）と同じ傾向を示し、

①全体としては倫社より政経の方が興味・有益ともやや高い⊕を示している。

②女子は男子よりも、倫社の方に、逆に男子は女子よりも政経の方に興味・有益とも⊕の度が高い。

3. 倫社政経学習の効果

高2・高3とも学習の効果についてはほぼ⊕6割、⊖2割、0→2割ぐらいで、全員が積極的に支持しているわけではない。⊕についても、その理由はさまざまで、手放しで喜んでうけとることもできない。しかし、できるだけ⊕をのばし、その⊕の積極的な面を一般化していく方向に倫社政経教育の今後の可能性を期待していきたい。2学期末に、今までの学習によってどのような思考の変化を自分の中に認めるかをのべさした

文を整理して、⊕のものを次のようなタイプにまとめてみた。

A 1 混乱

2 多面的思考、他の立場への理解

B 1 「思想」への接触・興味・関心、「考える」機会。

2 思想家と思想への「開眼」

C 1 悩みへの情報、共感

2 自己の整理・自覚・成長

D 1 「現実」との接触、現実的思考

2 社会的・批判的思考

E 1 論理的思考

2 理性的思慮

以下、それぞれのタイプについて生徒のなまのことばを引用しておこう。

A1. 混乱

○ 次から次へと異った考え方を教えられると、頭の中でラッシュのようになって、自分の考えまでおかしくなってしまうような気がした。

○ 先生がいろいろなことをいわれるので、自分の考えも迷ってしまってはっきりしないことが多い。（しかし、それでいいと思う。）

○ いろいろ考えさせられる問題を多く出してくれ、又自分の未熟な考えを時おり反省させてくれる。

○ 痛いところをつかれる。

○ 倫社と政経のアウトラインを知った為に、かえっていろいろなことがわからなくなってしまった。

○ 現在頭の中が混乱してはっきりいえませんが、いろいろの角度から一つのものをとらえるという方法を知りました。これだけでもプラスだと思っています。

A2. 多面的思考。他の立場への理解

○ 今まで、自分の考えていることを他の人もそう思っているものだとかんちがいしがちであったが、あらためて、人の考え方のいろいろあることに気がついた。しかも、ある程度までは、なるほどそういう考え方もあるなと理解できるものもある。

○ いろんな見えなかったものが見えるようになったように思います。今まで見ていたものも、それを見る別の目があることに気がつきました。

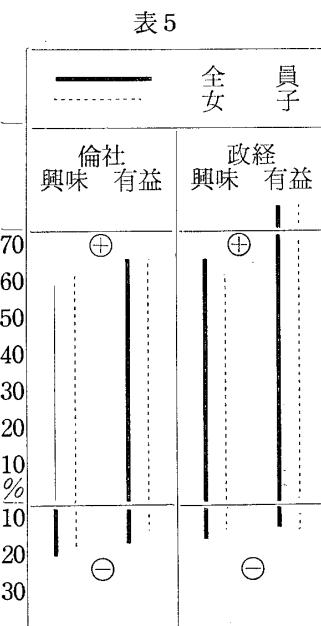
○ 多方面からものごとをとらえ、また、それを含む全体についても考えるようになった。

○ 考える時に、もっと自分の知らないいろいろな立場の人があいて、そういう人はそういう人なりに、自分達の考え方をしているのだなあ、と思うようになった。

○ 何でも物を反対の立場で考えて比較するようになった。

B1. 「思想」への接触・興味・関心、「考える」機会。

○ 習ったことに関する本などを読みたいと思うようになった。



教科教育研究

った。

◦ 人間というものに興味をもつようになり、本を読みたいという思いが強くなってきた。いろいろな人の思想にふれてよかったです。

◦ 日常とりたてて考えることがないので、この時間は貴重だと思う。

◦ 時代をおっての思想を知っていくことは、自分の中にまだ芽が出ていないものが少しづつ芽が出てくるようで楽しい。

◦ 今まで読んでみようとも思わなかった、思想家の本を読んでみたり、僕なりにひかれる思想家を見つけたという事だけでも大きな収穫であった。

B2. 思想家と思想への「開眼」

◦ 現在でもなお人々の指標となり啓示をあたえている偉大な思想を完成した幾多の思想家は、2, 3を除いた他は皆観念の世界では大勝利者となったのに対し、実際の世の中では冷遇、追害されていたことがわかった。だからせめてその思想の10分の1でもよいかから理解し、実際に生かしていく義務が、知った以上はあるんだと自分自身いいきかせて、「人生論ノート」などを読んで、思さくのまねごとをはじめるようになった。

◦ 偉大な思想家達が、皆ほとんど、それまであった思想への不信・絶望・否定から出発しているという事実、そして、それでもなお、自分自身の信じ得る思想をうちたてずにはおられなかつた事。彼ら一人一人の生き方そのものが彼らの思想に大きな関係をもつたという事。これらを少しでも知れることは、うれしく、感動的でさえある。もっともっと知りたい、考えたい、苦しんだり、感動したりしたい—そう思う。

◦ 今までいろいろな思想を学んできたが、それらのうちどれもが、一つとしての矛盾のない思想ではない。偉大な思想とは、ある一部の者達だけの幸福だけではなく、すべての人々を幸福にできなければならぬと思う。

C1. 悩みへのインフォーメーションと共感

◦ 話し合い—青年期について—が特に印象に残っているし、また有意義だと思っている。

◦ 倫社の学習によって私の知識が深まったと思う。とくに青年期のところは、現実に私たちが悩んでいる問題をとり扱ってくれたので、有益でした。

C2. 自己の整理・自覚・成長

◦ 私たちが考えることの限度がいかに幼稚で浅いものかがわかった。

◦ 他人の考がわかり、逆に自分の思想の立場も不十分ながらも明らかになってきた。

◦ 自分自身をみつめる上で役立ち、有意義であった。

◦ 自分が今まであちらこちらから聞きかじったり、知らず知らずのうちに影響をうけている考え方方が、どんなところから出ているのかがわかり、自分の考え方を整理できたように思う。

◦ 自分が大きくなるその過程で、このような人間とは何かetcの問題を私達に与えてくれ、それをまた考えることによって自分の成長にもなる。また、自分の考えなどが考えら

れる過程で、この倫社の学習が自分の思考を作る(変化する)。それでいろんな面の事を考えて、何かあった時など学習してきた事などを考えて、自然に何か強くならなければなどと思ってしまう(思考の面で……)。

D1. 現実との接触的現実的思考

◦ 倫社・政経の学習を終えようとして、現在の自分は以前より思考的に、多分に現実的になったと考える。思想そのものがどうかということより、現実にいかにしてそれを生かしていくということが問題であると考える。

◦ 政経によって社会の経済状態を見る態度が抽象的から具体的になったと思う。

◦ 政経を学習してから、新聞の政治面と経済面を以前にくらべて熟読するようになって、その問題の背景などを時々考えることがあるようになった。

◦ 中学で習ったことの他に、その機構の下にうずくまる人々の状態等がわかった、社会の実態を少しでもはっきりとみられたとはよいことだったと思う。

D2. 社会的・批判的思考

◦ 政経の学習を通して、社会への目が開けたようになる。この社会の矛盾、経済的機構の複雑さ国際社会で日本が直面している事実等…。

◦ 倫社、政経は勉強しなくても、別に世の中をわたっていけないことはないが、それでは社会という機構の中で何もすることなしに終ってしまう。考え方の面でも、政治的知識の面でも、何らかの利益を得たように思う。

◦ 政治・経済を考える時、以前は日本は大国だと思って、現実に満足していたが、今は現実に不満である。それをかえること、改革することにも反対で、以前のように主義的な思想がなくなった。

◦ 保守党的政治を分析していくと、今の政治ではだめだという判断が保守党支持を変えた。政治批評を考える要因となつた。

◦ 政経を通して、とくに経済的なことから唯物論的な考えが僕の前におしだされたようだ。

E1. 論理的思考

◦ 自分の考えをまとめてことばに表現することが大切だと思った。

◦ 物事を系統的に考えられるようになったみたい。

◦ 以前よりはやや物事を深く、段階的に考えるようになった。

E2. 理性的思慮

◦ 広い立場に立って物事を考えるようになった。系統をたてて考えることが大切だと思った。

◦ 自分の思考形式の中に多様的な考え方に対する配慮がつけ加わったようだ。

◦ 物事をじっくり考えるという習性がついてきたし、とくに自分の考えが定まった。マルクスを見直した。僕の考えるべき道が与えられた。

◦ 現実と思想とのつながりが深いものだと感じた。この学習からだけでなく、年令的にも、思考する時冷静になつたと思う。思想の複雑さが前よりも強く感じられるようにな

った。

4. 倫社政経学習の障害

3で効果の面を考察したが、そのような効果は十分にはあげることはできないし、またそのような効果を自覚している生徒でも、学習が常にスムーズにいっているとはいえない。教えている教師の私自身がいつもゆき悩んでいるのである。その障害を少しでも明らかにしてみたい。

授業の過程で、またこれまでの6年間の研究の中で、生徒があげる障害はおおよそ次のように類別することができる。

1. 基本的な知識・教養が乏しい。
2. 教科書のコトバ・表現・内容がむづかしい。
3. 授業が面白くない（分らない・ピンとこない）。テンポが早い。
4. あまり役に立つとは思われない。（現実との距離、死せる思想、受験や他の勉強で忙しいの一）。
5. 複雑で、あいまいである。バラバラでまとまりがない。表面的なものを、暗記だけしてみてもしようがない。

以上のうち、5.の問題は教科内容の構造化や、資料の使用などの方法で解決していくことにして、基本的なものは1~4であると思われる。そこで、2学期末に表6のような調査をしてみた。4のイ（受験）の項で3年の男女差がめだつ（33:22）以外は殆んど男女の差がないので、学年ごとに%を示すことにする。

（表6）

事 項	学科	学年	
		2年 (倫社)	3年 (政経)
1. ア 基礎的知識の乏しさ		68%	52%
	イ そういう本・新聞を読んでいない	60	56
2. ア 教科書のコトバ・表現がむづかしい		32	12
	イ 教科書の読み込みがむづかしい	16	10
3.	ア 先生の話がむづかしい	23	6
	イ テストの勉強の仕方がわからない。	28	16
	ウ ノートのまとめ方がわからない	20	16
	エ おぼえる分量が多い	5	18
4.	ア あまり役に立つとは思われない	15	1
	イ 受験勉強と結びつかない	8	22

受験とおぼえる分量の項で3年が高い数を示しているだけで、他はみな2年が障害を訴える割合が大きい。これは3の<効果>のところで3年が高い⊕を示していたのと関係があると思われる。2年が倫社の学

習で3年の政経に比べて困難を感じる度が高いのは、抽象的思考能力の発達の1年間の差と、倫社と政経の学習内容の差とがからみあっての結果であろうが、今後更に検討を要する問題である。テストの勉強のしかた、ノートのまとめ方がわからないというのが多いのは、記述式のテストで、全体的な把握と自分のコトバでの表現が要求されるせいで、○×式のテストを行なえば減少するものと思われる。（テストの問題については前報告参照）。

III. 「思考の科学」の提案

以上、IIで生徒の意識、態度、思考の隘路、それに対する倫社政経の授業の方法とその効果、障害について考察してきたのをふまえて、「抽象的・論理的思考」の形成の問題を更に考えてみたい。

<現在の状況で学校教育は何をなしうるのか、>

状況はたしかに楽観を許さないものがある。私は次のように状況をおさえてみた。

- A 1. 個人主義的・自己中心的態度
- A 2. 衝動的・感性的・情動的思考 } 体制的・ムード的生き方
- A 3. 慣習的・埋没的思想 }
- B 4. 受動的反省と個人的心がまえになりやすい日本のモラル教育の危険
- B 5. 単眼的・イデオロギー的発想となりやすい革新派の思惟構造

そのような状況に対して学校の教授=訓育の役割は何か。それを、私は次のように図式的に考えてみた。



I 日常的・感性的思考 → II 論理的・科学的思考
→ III 自覚的人格的思考

IIIは、感性的なものを基盤にしながら、論理的なものを媒介にした主体的内面化・集団的連帯化の統一、操作的思考、内容的・構造的両側面の結合をめざす、単独者と大衆の二重の道を自己の中にふくむ全人間的なもの、である。その理想に至る道はIIの方法を通じてであると思う。前に述べたように、感性的・心情的なものを無視した啓蒙的悟性のみではだめであるが、事実の中で事実をつかむ客観的・合理的な思考操作、持続的で論理的な思考を通してはじめて、それは誤謬や「理性の供犠」*をまぬがれることができる。

(*この点について、とくに長尾龍一「イデオロギー的思惟の源と構造」<『思想』No.506> がすぐれた分析を示している。)

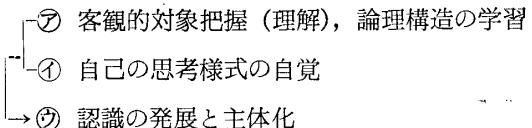
I → II → IIIの過程は、次の要因をふくむと考えられる。

- ①意識化—自分の思考様式を知り、視座構造を明確

化する。自己の客觀化。

- ②「論理構造」の學習—學習の目的は問題解決にあるのではなく、問題解決を可能にするようなシエマをつくりあげる点にある。* (*この見解は、滝沢武久「教育的認識論」にくわしい。)
 - ③再構造化—自己の今までの見解をふくみながら、修正発展させて、新しい統一に到達する。
 - ④主体的思想化—単なる論理的思考でなく、人格的・主体的なかかわりの中で自覺化された論理的思考、意欲と感情、現実への評価、もののみかた、行動のしかた、社会関係の選択をうみだす。
- このうち、④は、彼自身の内面的な全体験（その中に過去の外的条件の規定もすべてふくまれ、未来への視野も反映される）によって決定されるのであって、教育—その中の学校教育・さらにその中の一教科の教授が関与できる領域はきわめて限定されていると考えるのが妥当である。教育（教授・訓育）は①②③を過して④に影響を与えることができると考えるべきであろう。

そのための方策は次のように図式化して考えることができよう。



それは、次のようにも整理できよう。

- ⑨新しい角度からの、より広い客觀的な情報の提供、既成の枠の破壊（概念くだき）、未知の分野への開眼
- ⑩自己の問題の把握、その深化・拡充
- ⑪論理的体系化（整理・限定・明確化・関連・統一・理論化）、仮説の形成
- ⑫実践—仮説の適用・修正・発展

このような方策を教授=學習の過程に具体化して考えると、次のような教授の原則としてまとめることができよう。

1. 生徒を<教授の客体>であると同時に<學習の主体>（認識の主体）としてとらえること
 - ア. 生徒の現実・実感・問題意識との結合
 - イ. 生徒集団の相互交流の重視
 - ウ. 生徒個人の内的条件としての過去→現在の思考様式の把握の上に
2. 外的条件（与件）としての教授内容の量と質を精選すること
 - ア. 内容の量的縮少と質的精選（少にして精）
 - イ. 教育的系統の論理的構造化
 - ウ. 内容のもつ感動性と論理的文脈の重要性
3. 発達を促す原動力としての矛盾の重視

ア. 概念くだき

イ. 価値葛藤の場

4. 内的条件と外的条件を結合する場としての授業

- ア. 分りやすく、面白い授業
- イ. 正確に、迅速に、徹底的に
- ウ. 正しく、広い認識へ

以上のような授業を通じて、論理的思考を育てていくことができるならば、少しでも状況を対象化し、自己を主体化する方向へ一步ずつ進んでいけるのだと思う。

<認識と思考を訓練することによって、より正しい思想へ>という道を考えるべきで、できあいの思想を与えようとする教師、結論だけを求め結論に反撲する生徒、といった性急さや誤りにおちいらないようにしたい。思考と思想、認識論と価値論の両面の他に、心理的・社会的事実（存在）の領域の學習を含む倫社教育の果す役割は大きく、しかも困難である。しかし、今までのところ、思想史のとり扱いや、社会的存在の問題だけがとりあげられてきたような感が強い。「道徳の科学」*としての倫社の主張はそれよりはるかに前進したものだと思う。

*中内敏夫『倫理・社会』教育の目標・方法およびその本質（講座「社会・倫理」5「現代の倫理と倫理教育」所収）

しかし、そのねらいを真に実現する意味からも、それらの學習を成立させる「思考」の教育が必要なのではないかと思う。その観点から、私は「倫理」を支える「論理」の教育が必要であると主張したい。

とくにその必要は、次の二つの要因によって強化される。すなわち、

a. 現在、高校教育の大衆化にともなって広汎な層の能力をもつ青年が高校生となっている。旧制中学生の数は現在の大学生の数より少ないとすらいわれる。旧制中学—旧制高校生という選ばれた素質の所有者たちとくらべて、現在の高校生には、教育的に系統的な論理的思考の訓練が必要なのではないか。これはまさに、今後の日本の将来をも左右することにもつながる。ただでさえ高度化してゆく科学技術の発達を自らのものとしていくためにも、また真に自分たちの幸福をつくりだす社会を建設してゆくためにも——。

b. 青年中期としての高校時代は、心理的発達段階からみても、文学的・感性的なものから、思想的・哲学的なものへ発展してゆく時期である。

①「かれらはまだ純粋な理性批判ができない。抽象的な思考をもちはじめるが、それはまだ知性に徹する立場には分化していない。理知的に自己をとらえることはできないので、情緒的な手法が用いられる。ロマンチスト的、文学的态度である。ふつう大衆的な恋愛小説が文学への入門となっている。そのうちにもっと深い真理まで掘り下げ、もっと強く

真理に接近しようとするようになって純文学を読みだす。そしてやがて、人間の表層の苦悩は相互の和解によって感情的には解決するが、深層の問題は永遠になぞとして残るものであることを知り、つぎに哲学的な考察を求めるようになる。このように青年中期は、人間の覚醒期であるといつてよい。」(坂本一郎)

②「青年期の中頃から後期にかけて、知的な発達は内面に向かうことに特徴がある。思索する能力が発達するにつれて、この頃から抽象的な事象へ興味が移行してゆくことも知られている。人間の行動については、外的的なものから内面的なものへ、つまり日記などを通じて、自己の心理的な動きを分析することができ、また文学や映画などを通じて、他人の行動についても強い関心を向けはじめめる。社会的な事象については、社会生活へ強い影響をおよぼす政治的問題への関心が高まり、同時に思想の重要な点を理解していく。宗教や芸術の内面性についても理解することができるし、将来への希望や理想が、単なる夢のベールを取りはらって実現の可能性の枠の中に組み入れられてくる。」(佐藤 正)

(①・②とも講座「生活指導の心理」5.『高校生の生活指導』所収論文)

引用文にも明らかなように、文学的感動から抽象的思想への高まりという経路は重要な視点であり、倫社教育の論理的思考の重視は、文学教育を内にふくみつつ、それを発展させるものとしてとらえられねばならない。ともかく、この時期が、眞の意味での人間形成の時であるという点でも、高校における<倫理=論理>教育の確立の急務が主張されるのである。

IV. むすび

1. 結論的に――

36年から6年間の実践を続けてきた。これからもずっと取り組んでいくつもりである。その中間の路程標として第6報告を提出する。いろんな問題が私たちをとりまいている。そのうずまきのただなかで、私が感動した2つの文を引用して、むすびのことばにしたい。(倫社政経のみならず、教育というもののハカナサと光明について教えてくれるように思われる。)

「教育というものは、見ようによつては、社会が若い世代に要求し期待するものの総体のことだ。そのよしあしを問わず、今の社会になじませていく力のすべてを、やはり教育といわねばならないのは、残念なことだ。しかし、その社会自体が、人間を苦しめ不幸にするものを克服していく希望の源について、青年に教えもある。社会は、不幸と害悪にみちているようだが、同時に存在する人類が育ててきた高貴な精神の遺産は、理想や歴史的展望を若い世代に与える。」

「自分でそれと気づかずに、どこかで感じることのできた純粋な感情が、青年たちの遙かに遠くを望むまなざしを支える。」

2. 今後の計画

ア. 倫社

今まででは、毎年教科書を変えながら、それぞれの内容構造をたしかめ、生徒に対しては同一教科書を使用しながら、教授=学習過程をさまざまに変えて比較研究をすすめてきた。一応授業の問題については見とおしを得たので、来年は

- i. 従来の多くの教科書がとっている普通のタイプ。
- ii. 工夫された構造と進歩的内容をもつタイプ。
- iii. 新しくなされた、今までとは大きく異なる構造配列のもの。

の三種の教科書を、同一学年の各クラスにそれぞれ一つずつ使用して、比較研究をすすめる予定である。

イ. 「思考の科学」科

高校3年の選択教科として倫社1時間をおき、希望者に、国語・数学・物理・化学・生物・歴史・倫社政経などの教師の協力によって、論理的思考の訓練の実験的試みをする。(本紀要P.49参照)。そのデータを蓄積して、テキストを作っていくたいと考えている。

ウ. 政経

資料集の利用、新聞・雑誌の利用による「現代的内容の導入と学習指導。教科書の内容分析・比較検討。

3. おわりに

以上で第6報告を終る。御批判と実践・経験の交流を乞う。

附記

現場はまことに忙しい。そのため、本年は、昨年とりくんで、今年も資料だけは集めてきた、「中等教育における道徳教科史を通してみた<国民道徳>教育の研究(修身公民=倫理政経教育史)」の第2報告をまとめる余裕をもてなかつた。本年は1967年、来年が明治100年祭で、このところ、「宴」「英靈の声」「憂國」「北一輝全集」「三木清全集」「日本ロマン派研究」「小林秀雄全集」など、昭和10年代に対する回顧の風潮も高まっている。それは、公民科が皇民的公民科へ変り、やがて国民科に吸収されていく時期であった。それから約30年たつていて。関心の高まりが復古できなく、「前進のための学びとり」であることを念願したい。時間的余裕を得て、修身公民教育史の第2報告をまとめたいと思うが、今回はこの第6報告だけで御許しをいただきたい。